

# 交通

## 評論



古希を過ぎると同窓会が増える。中学、高校などいろいろなグループで集まるが、大学の学科の同期会が最も活発である。筆者の属した農芸化学科では50名の卒業生のうち44名が存命で、春は総会、秋は1泊旅行を企画する。

しかしながら「農芸化学科」という学科名は現存しない。1893年(明治26年)に発足したこの学科は100年後の1994年(平成6年)に課程名を残して消滅し、現在では生命科学・工学専修に改組された。

この分野の研究者が集まる「農芸化学会」は、バイオサイエンス・テクノロジの発展を支え、1万2000名の会員を有し活発であるが、大学の学科名に農

芸化学を残している所は少ない。出身学科は学生数も増え続け(現在1学年90名)、「農業の化

学」という範疇(はんちゅう)からはみ出してしまつたことによる改組とされるが、「農」という字が学生に嫌われるという思惑があったのかもしれない。1980年代後半から日本の大学から「農」の字が少なくなつたような気がする。

よい学生を集めることは大学にとって致命的に大切なことなので、若者の好みを優先する対策も理解できなくはない。しかし、我が国の大学の学科名は変化が激しすぎるのではないだろうか。古在由直、鈴木梅太郎などの偉大な先人の歴史を有し、盛岡高等農林では宮沢賢治も学んだ農芸化学の名前が消え

てしまつたのは寂しいと感じている。ところで、最近別の観点から、学科名(それが代表する分野)と学生数に関する憂慮すべき記事を読んだ。静岡大学防災総合センターの野津憲治客員教授(東京大学名誉教授)によると、3・11の悲劇を生んだ背景に、「理学の中の地

かけため、昨年の巨大地震の可能性を予測できなかった。また、原子力工学科ではチエルノブイリ事故以来学生数が激減し、全国の学部学生数は1994年の1800名から2008年には100名以下になつたという衝撃的なデータが示されている。

その後少し回復したとはいえ、専門教育を受けて原子力産業の第一線で働く人たちの供給源が全国で年間200人以下であるというところは恐ろしい。原子力産業の方は逆に巨大化し続けているのである。

### 土器屋 由紀子

## 学科の名前

の結果、原子力産業の最前線で働く30代の人たちはほとんど大学で原子力の専門教育を受けておらず、1970年代、80年代に教育を受けた人たちが上から辛うじて支えている状況のとことである。

事故当時を振り返って野津さんは、「発電所事故に備えたシステムが機能しなかつた原因の一つは教育問題である」と考えている。全く同感である。「安全神話」に頼って基礎教育が抜けてしまつていたと思う。

「国家百年の計は教育にあり」が今まさに問われており、学科名を魅力的に変更に学生を誘うなどといった姑息な手段ではなく、今後必要になる除染や核物質の最終処分本気で取り組む学生を育てるために、今こそ国を挙げて原子力教育に本格的に取り組まなければならないのではないだろうか。

例えば東大・原子力工学科は1993年に「システム量子工学科」と名称変更を行い、日本の大学から原子力工学科が消える先鞭(せんべん)となつた。その結果、原子力産業の最前線

1970年代にプレートテクトニクスやアポロ計画による月面試料などで黄金時代を迎えた地球科学分野の学生数がその後減少し、さらに分野の停滞に拍車を

(江戸川大学名誉教授)